



小 論 文

試 験 科 目	ペ ー ジ	解 答 用 紙 枚 数	時 間
小 論 文	1～ 8	1 枚	90 分

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は8ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には監督者に申し出ること。
3. あらかじめ届け出た試験科目(英語、小論文の内の1科目)を解答すること。
4. あらかじめ届け出た試験科目と問題冊子が一致しているか確認すること。
5. 解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。
6. 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
7. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
8. 解答用紙は持ち帰らないこと。

小 論 文

以下の資料は、小松理度『地方を生きる』（筑摩書房、2021年）からの抜粋である。これを読んで、次の設問すべてに答えなさい。

問Ⅰ 資料を600字以内で要約しなさい。

問Ⅱ 著者は資料の初めの部分で、地域の復興について、「地域のためとか、復興のためとか、家のためとか日本のためとか、そういうことは一切考えなくていい」という考えを述べています。あなたはこの考えに賛成でしょうか、反対でしょうか、賛成でも反対でもない別な考えをもつでしょうか。600字以内で論じなさい。

解答は、解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答にあたっては、解答用紙の1マスを1字に使い、句読点、引用符、カッコなどはいずれも1字として扱う。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。

<資 料>

この章でぼくが最も伝えたいことを前もって書いてしまうと、地域のためとか、復興のためとか、家のためとか日本のためとか、そういうことは一切考えなくていい。あなたは、あなただけの人生を堂々と歩むべきだ、それが地域とともに生きること、課題とともに生きることなんだ、ということです。

災害が起きたり、課題が深刻になると、「復興のため」だとか「地域のため」だとか、個人よりも大事な何かが生み出され、多くの人がそれに動員されていきます。日本の、特に地方は課題だらけですから、これからは、地方の再生のために命を投げ出すような動きが称賛されるのかもしれませんが、けれど、そういうものは大抵まやかしたと思っています。そんなもののために自分を犠牲にしないでください。大事なのはあなた自身です。どこまでも、自分の関心や興味や、自分の課題や生きづらさから出発すればいいんです。それぞれが多様な、自分だけの「復興の物語」や「地域創生の物語」を生きていけばいい。ぼくがこの章でいいたいことは、実はそれだけだったりします。

なぜそんなことを考えるようになったかという、被災地でやたらと「復興」が叫ばれたからです。震災のあった2011年以降、ぼくは「復興とはなにか」ということを自分なりに考え続けてきました。メディアで、リアルな生活の中で、何度も何度も復興という言葉聞いてきました。実際、地域の復興を掲げ、様々な人たちが尽力し、膨大な復興予算を使って震災前の姿を取り戻そう、新しいまちを作ろうとしてきました。

ところが、復興とは具体的に何を指すのか、何がどうなったら復興だと言えるのか、はっきりとした定義を誰も共有していないんです。そればかりでなく、復興計画に従って再生された地域に行ってみても、復興したと言えるのか、余計に分からなくなりました。「復興のために」と皆が叫びます。でも、個人個人の復興のイメージは異なるはず。復興という言葉は、個人個人のイメージや思いを押しつぶし、無理やり一括りにしてしまう。2018年に書かれた『新復興論』という本には、ぼくの「復興への疑問」も綴^{つづ}られています。

いわき市は復興したのでしょうか。地元の小名浜^{おなはま}に目を向けてみます。ベイエリアに復興のシンボル「イオンモールいわき小名浜」ができました。週末ともなれば多くの買い物客で賑わいます。港町は、美しく再生したと言えるのかもしれませんが。モールのそばには、震災後に新しく完成した、赤煉瓦^{れんが}の美しい小名浜魚市場もあります。津波で傷を受けた物産館「いわき・ら・ら・ミュウ」も復活。小名浜港から北へ向かえば、海岸沿いには防潮堤が完成しました。もし次に大津波が来たときには、きっと住民を守ってくれるのでしょうか。いわき市で最も甚大な被害を受けた豊間地区^{とよま}、薄磯^{うすいそ}地区では住宅地^{かさ}の嵩上げも完了し、新しいまちづくりが始まりました。かつてそこに暮らしていた人たちが少しずつ戻り、新たな住民を迎え入れようと、様々な地域づくりの取り組みが模索されています。

けれどもその一方で、イオンモールに来る客は、イオンにはお金を落としても地域の商店街には期待したほど恩恵をもたらしてはくれません。新しく巨大な魚市場は、震災前の水揚げ量を2割程度しか回復していない状況から鑑みるとかなりオーバースペックです。冷凍庫や冷蔵庫を回す電気代など維持費もバカにならないでしょう。漁業の復興のシンボルは、近い将来、小さくない負担を地元に残すかもしれません。防潮堤はその地域の人たちの暮らしを守りますが景観は奪われました。町から海が見えないのです。確かに屈強な壁ですが、砂浜に降り立ってみると、その壁は、海側からくるあらゆるものを拒絶しているようにも見えます。宅地は造成されましたが、被災地の多くでその宅地を作るために周囲の山が削られました。それは人為的に里山の風景を改変することにほかなりません。復興とは、現代の人間の都合だけで、何百年と存在し続けてきた風景を変えてしまう暴力的な行為でもあるわけです。

かつての港町、浜のまちは大きく姿を変えました。震災直後、津波で被災した住宅の解体をスムーズにすべく「解体助成金」が支給されたこともありました。それによって古きよき港町の風景をkarouじて残っていた古民家がかなり解体されました。新しい暮らしには必要な解体かもしれませんが文化的には大きな損失です。

まちは新しくなった。けれど、そのまちらしさを作っていた風景がなくなりました。津波でまちが破壊され、変わり果てた姿になる。それを一度目の喪失とするなら、いまは二度目の喪失を味わっていると言えるでしょう。「こんな復興を望んだのだろうか」という思いが時を経るごとに強くなっているように感じられます。これが

「二度目の喪失」です。一度目は災害でしたが、二度目は復興、つまり人災で、その地域らしさが傷つけられたわけです。

復興とは「地域づくり」でもあるはずですが。どの地域も、より魅力的な地域にしようとして奮闘を続けてきました。復興というと被災地特有の出来事のように思えますが、復興とは、地域の魅力を膨らませ、課題は小さいものにする、つまり本質的には地域づくりです。それなのに、魅力的な地域の源泉となる風景を破壊し、形だけが整えられた安全なまちを目指しても、それを地域づくりとってよいのでしょうか？

「復興」の名の下に、中身のない、がらんとした器のようなまちを地域の人たちに手渡して、「あとは皆さんの努力でがんばって」と放り投げてしまう。それは復興とはいえない。むしろ、衰退を早めているだけじゃないかとすら思います。たしかに防潮堤でまちは安全になった。公共事業で地域も多少は潤った。けれど、あと30年もしたら、高齢化によって、そのまちに住む人はさらに減っていきます。数兆円とも言われる予算を使って建造した巨大防潮堤は、30年後、そのまちの一体何を守るのでしょうか。

この9年半、メディアには「風評被害に苦しむ生産者」や「震災復興に取り組む団体」が数多く登場しました。中学生が合唱コンクールで金賞を獲れば「復興の歌声」になり、高校野球で福島代表が勝利すれば「復興への力」になり、生まれたばかりの子どもは皆「復興への希望」といった具合に、復興の物語が再生産されていきます。そうやって、被災地はメディアによって外側から「復興に向けて頑張る被災地」像を押しつけられてきました。

一方で、内側から「頑張る被災地像」を求めていく動きもありました。これは「助成金」や「復興予算」に絡む取り組みに関係しています。国から予算を取るには「まだ復興していない」状態でなければなりません。課題があるからこそ復興予算を使う権利があるわけです。すると、申請書に記載される課題は大きいほうがいい。まちづくり系の事業で予算を引っ張るには「コミュニティの再生」が、地域物産系では「風評被害払拭のため」が大義名分になります。復興するために、復興していない状況を必要としてしまうのだとしたら、復興から遠ざかることにほかなりません。

ぼくは、復興というのは「復興という言葉が必要としなくなる」ことだと思いま

す。けれども、逆に復興しようと思えば思うほど自立できない状況を作ってしまう、「復興」という言葉に依存してしまう、そんなジレンマがあるように感じます。これは、地域づくり全般に言えることかもしれません。復興というマジックワードではなく、もっとヴィヴィッドに課題に光を当てる個別の言葉が必要です。

災害が起きる。課題が深まる。そこには必ず「当事者」という存在がいます。困難を余儀なくされた人にとって「当事者」という言葉は重要です。似たような困難を抱えている人たちの間に共感を生み、理解者を増やす言葉でもあるからです。けれども、その一方で、当事者という言葉は「非当事者」という存在をじんわりと浮かび上がらせてしまうとも感じています。「当事者じゃない人にはわかるまい」と言われたら、外側にいる人は「当事者じゃない自分には関われない」と思ってしまうだろうし、かえって迷惑をかけてしまうんじゃないか、自分には関わりがない、と感じてしまうでしょう。課題が重いほど社会全体で支えなければいけないはずなのに、当事者の外側にいる人のゆるい関わりを難しくしてしまうわけです。

震災と原発事故もそうでした。この9年間は当事者のリアリティが強く働いた時期でもあったと思います。私たちの苦しみはあなたにはわかるまい。当事者ではない人間は口を出すな。そう言われると、外の人に関われなくなってしまいます。誰かが決めた「正しい関わり」以外の関わり方が排除されてしまうわけです。

たとえば、「あなたは〇〇町の地域づくりの当事者ですか？」と聞かれたらなんと答えますか？ 自治体の職員や地域の企業の経営者、拠点を持って場を運営している人、明確に目的を持って課題解決を仕事にする人たちは自らを当事者だと答えるかもしれません。けれど、「当事者と言われるとなんだか腰が引ける」という人も多いはず。好きでお店を運営してるけど商工会に入ってるわけではない。防災に興味はあるけど消防団に属してはいない。地方都市に住まいがあるけど別のまちにも家があって2拠点生活中だとか、いや、住んですらいないけどお気に入りの場所があって通るとか。そんな関わりを、ポジティブに^{すく}掬い取りたいとぼくは考えてきました。「当事者」、つまり「事に当たっている」わけではないけれど、「事を共にしている」という人は結構いる。そんな人を「当事者ではない」なんて排除してはいけません。

課題があるところには、必ず議論が起きます。深刻な課題ほど議論は二分化され、徹底して課題に寄り添うのか、あるいは突き放して反対するのか、関わりが「賛成／反対」で分断されていくように感じます。政治的な党派性が持ち込まれ、議論は進まず、分断がさらに進む。そんな時代だからこそ、ぼくは、当事者性や専門性に左右されない「ゆるい関わり」が必要なのではないかと考えるようになりました。当事者性の濃さや専門性の高さ^{とろ}に囚われることなく、本書で何度も示してきたような、個人の興味や関心を通じて課題と関わる回路が必要だと。ぼくは、そんな関わりを「共事／共事者」と呼んでいます。自分は当事者とは言えないけれど、事を共にしてはいる。関心はある、気になって見ている。けど具体的にはまだ行動に移せていない。そんな人たちをイメージしています。

問題が深刻なほど、課題が大きいほど、活動は、その地域の課題を解決する「ために」行われるようになります。つまり、目的先行型の関わり、前の章で紹介した「やるコミュニティ化」していくわけです。課題が差し迫っているのだから仕方がないのかもしれませんが、でも、それだけだとなんだか息が詰まる感じがします。景色がいいとか、食べ物が美味い^{うま}とか、山が好きとか友達が住んでるとか、そういう個人の思いから生まれる関わりがあっていいはずだし、ぼくはいつもそういう関わりを作ってきました。

地域は、結果的に元気になればいい。ぼくは行政マンでもなければ大学の研究者でもないし、ジャーナリストでもない。まずは自分や家族、友人の人生を豊かにすることが大事であって、そのついでに、結果として、地域も豊かになればいい。明確な目的を掲げることなく、まずは自分の楽しさを優先する回路を守りたい。震災でも、それを強く思いました。当事者として「やる」コミュニティだけではなく、共事者として「いる」コミュニティ、共事的な関わりがもっと増えていくといいなと思っています。

新しい場人が集うようになれば、きっとあとづけで公共性が生まれていくはずで。共事者だった人が踏み込んで当事者になることだってあるでしょう。ぼくは、その地域をたまたま好きになってしまった人の極めて個人的な取り組みが、ひょんなことから社会に開かれ、課題と接続されてしまう、そんなエラーみたいな関わりに希望

を感じます。なぜなら、ぼくがそうだったからです。

福島海の現状を知りたいと思って始めた「うみラボ」も、うまい食べ物を食べたいと思って開催した「さかなのば」も、UDOKもみんなそう。地域活性のために、風評払拭のために、復興のためにやってきたわけではありません。みんな自分の生活を豊かにするためにやっているだけです。ぼくは、社会課題の当事者ではないし、震災だって家族を失ったわけでも家を失ったわけでもありません。たまたま福島県に住んでいただけです。ジャーナリストでもないし、大学の先生でもない。それでも、震災や原発事故を忘れてはいけないと思っているし、地域の課題にも関心はあります。そういう自身の「中途半端な関わり」をできるだけポジティブに捉えたくて、ぼくは「共事者」という言葉を発明しました。

地域づくりに必要な外部の人たちを「ヨソモノ・ワカモノ・バカモノ」と言ったりします。この三つを言い換えると、「外部・未来・ふまじめ」と言い換えることができるでしょう。確かに、被災した土地をどうするかを決めるのはそこに暮らす人たちですが、その決断は、「いまこの私」と「外部・未来・ふまじめ」を何度も往復した末に下されるべきだと思います。なぜなら、ぼくたちの地域は、「いまこの私」だけのものではないからです。地域とは、そこで暮らしてきたご先祖たち、未来に住むかもしれない人たち、偶然に移り住むかもしれない人たちや、未来の子どもたち、本当は関心を持っていたのに言葉を発するのをためらっていた人たち、そして、膨大な数の死者たち。そのような人たちのものでもあるからです。決めるのは当事者かもしれないけれど、外の目線も忘れてはいけない。ぼくはそういう思いを持って活動を続けてきました。

ただ、未来ばかり、外のことばかり考えていればいいというわけでもありません。震災後は、特に「未来へのメッセージ」ばかりが目指されてきたようにも思います。けれど、すでに「いま」が、過去の人たちにとって未来であるはずです。ぼくたちは、過去に生きてきた人たちが描いた未来をつくることはできたのでしょうか。過去の人たちの「未来はこうなってほしいな」という思いを実現できたのでしょうか。というか、過去の人たちがどのように生き、どのような言葉を残したのかを知ろうとしてきたのでしょうか。未来を考えることはとても大事ですが、ぼくたちはあまりにも

「過去」や「歴史」を軽視してはこなかったか、とも思うのです。「外部・未来・ふまじめ」だけでなく、過去に生きた人たち、つまり「死者」の存在を忘れることはできません。

震災後、ぼくは歴史に関心を持つようになりました。過去の災害や震災の記録、昔の人たちの暮らしぶりなども考慮しなければ、ぼくたちがいま何をすべきかも見えてこない気がするからです。その地域の文化は歴史が作り出したものです。なぜそこにそんな食べ物があり、なぜそのような風習があるのか。すべては歴史を読み解かないとわからない。気候や風土、その風土が生み出す食、地形や景観の美しさ、土地に息づく信仰や祭。市民性・県民性もあるでしょう。それらはみな、何百年という（地形でいえば何億年の）歴史が培ってきたものであり、それらを紐解き、価値を最大化しようとするれば、あるいは課題を解決しようとするれば、地域をフィールドにする人たちは歴史を軽視できません。

歴史は面白い。歴史は過去のもので、直接は触れることができません。つまり、歴史を紐解こうという人はすべてが「ヨソモノ」なんです。常にヨソモノ目線が働き、へえ、そうだったのか、そんな理由があったのかと面白いがる目線が生まれます。そして、そういう歴史との出会いを通じて、過去に生きた人たち、ぼくたちの先祖の思いを知ることにつながる。つまり、地域づくりとは、先祖の思い、死者の思いを知ることであり、彼らと対話することでもあるのだと思います。

（出題にあたっては小見出しを省略し、一部表記を改めた）

<注 釈>

UDOK.： 著者とその仲間たちが福島県いわき市小名浜で2011年5月から運営してきた「オルタナティブスペース」すなわち、何にでも使えるコミュニティセンターのようなスペースのこと。

令和5年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

経済経営学類 一般選抜 前期日程

出題意図

素材として、小松理虔『地方を生きる』（筑摩書房、2021年）のうち、第五章「地域の『復興』とは」の一部分（173頁途中から185頁まで）を与えたうえで、問Ⅰでは資料の要約を求め、また問Ⅱでは著者の見解に対する賛否もしくはそれらとは別に解答者の考えを示させ、これらの問を通じて、解答者の読解力、知識活用力、表現力等を総合的にみた。